

「あまおう専用肥料」による生産改善

福岡県農政部農業技術課

専門技術指導員

重 松 秀 行

本県のいちごは年間産出額が180億円を超え、県農業の重要な品目となっています。

いちご栽培の歴史は古く、明治末期に博多の万屋酒屋の主人が裏庭に植えたのが起源とされています。経済栽培が始まったのは大正初期で、その後、昭和24年に‘宮崎’、‘紅鶴’が導入されたことから県下全域に栽培が広がり、昭和35年に‘ダナー’、40年代に‘はるのか’‘宝交早生’、59年に‘とよのか’が導入され、生産は順調に伸び平成5年にはイチゴ生産日本一となりました。しかし、いちご振興の大きな牽引役となった‘とよのか’も、導入から約20年を経過したこと、他県の相次ぐ新品種導入により価格形成力が弱くなっていました。

‘あまおう’の育成

平成8年、福岡県農業総合試験場では、糖度が高く食味が優れる‘久留米53号’（旧野菜茶試久留米支場育成系統）を子房親、果実が大きく着色が良好な‘92-46’（福岡県農総試育成系統）を花粉親とした交配組合せから、果実が大きく、着色や食味が優れた系統を選抜しました。その後、現地適応性を調査した結果、促成栽培用として有望と判断されたことから、平成13年11月に‘福岡S6号’として品種登録申請（17年1月登録）を行いました。‘あまおう’は平成14年10月に商標法に基づき、販売等のために登録された‘福岡S6号’の名称で、あかい、まるい、おおきい、うまいの頭文字を取って命名されています。

‘あまおう’の特徴

果形はやや丸い円錐形です。果実の色は濃赤で果肉も赤く、果皮にはツヤがあります。

果重は‘とよのか’の1.2倍程度と重く、2L以上の大玉果実の発生比率は50%以上になります。果実の糖度・酸度は共に高く、食味は良好かつ濃

厚で、多汁で粘質であるため食感も極めて良いものとなっています。

‘あまおう’の普及

平成14年、‘あまおう’の試験栽培ほ場を県下全産地に設置しました。15年には系統共販面積の約50%まで、17年度には約380ha、系統共販面積の98%まで更新が進みました。

‘あまおう’生産技術改善

品種更新は順調に進みましたが、栽培に関してはいくつかの課題が発生しました。その中で最も大きな課題は、頂果房と第1次腋花房（以下2番果房）の間に出荷の谷が発生することです。特に11月から出荷を開始する早期作型では、その傾向が強くなり、1～2月の出荷が減少していました。

これは、2番果房を包む葉の数が増加しやすいこと、気温が低下すると展葉速度が低下するという‘あまおう’の特性に起因するものです。

2番果房の内葉数を少なくし、果房を連続させるためには、2番果房が花芽分化する10月上旬頃の肥効を抑制しなくてはなりません。また、分化後は肥効を高め、生育をスムーズにしないとはなりません。15年度までは、従来の「とよのか配合」を用いて、基肥の減肥で対応をしてきましたが、思うように樹勢コントロールができませんでした。このことから、N施用量のみでなく肥効の時期を考慮した専用肥料が必要と判断し、従来の「とよのか配合」に替わる「あまおう専用肥料」を試作することにしました（肥料別窒素無機化量グラフ参照）。

試作に当たっては【有機主体】、【有機＋緩効性肥料】、【緩効性肥料主体】の3つのタイプを検討しました。検討の結果、【有機主体】では、原料の構成を変更しても初期肥効が高いことから、【有機＋緩効性肥料】、【緩効性肥料主体】を試作

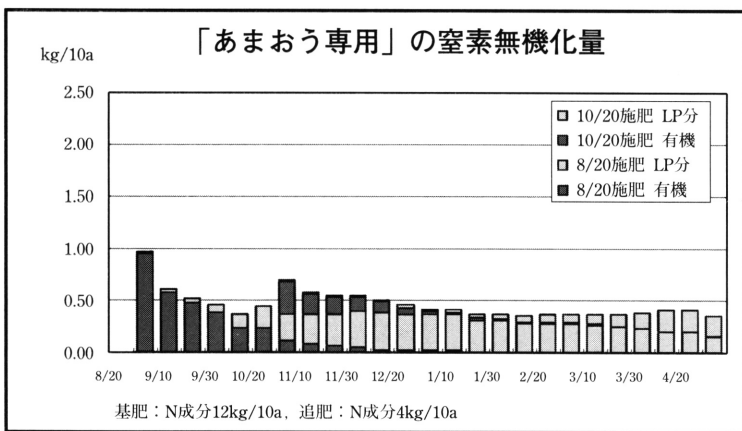
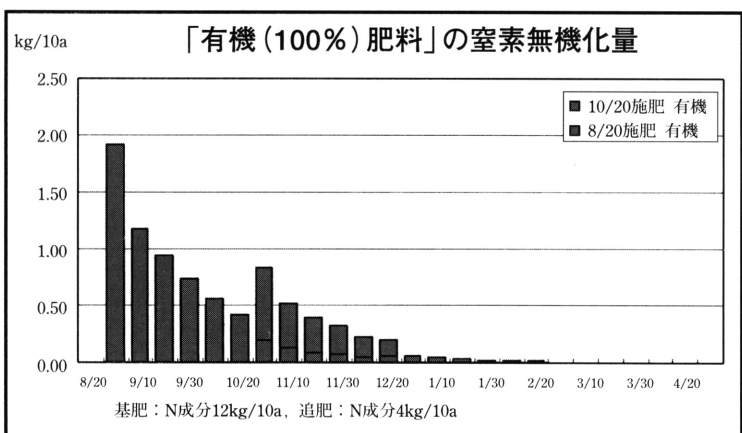
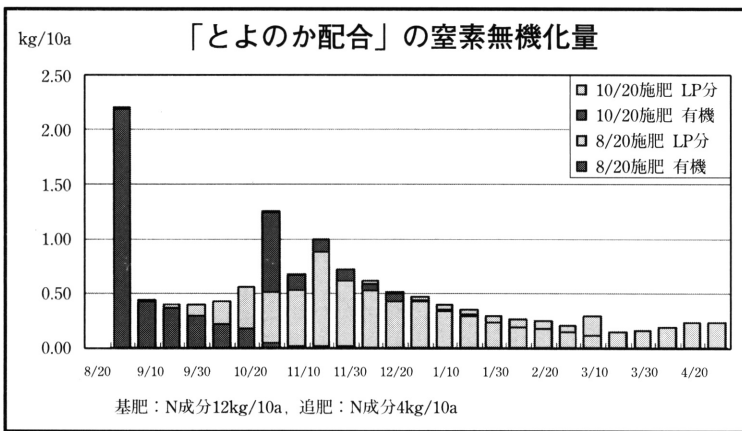


写真.



することにしました。

試作した肥料は、「FTE入り混合有機820」,「LPコートS120」,「リンスター」,「加里コート」などを原料に「有機820」57%+「LPコート」11%でN:P:K=8:6:5とした試作肥料1,「有機820」32%+「LPコート」26%でN:P:K=12:7:7とした試作肥料2です。

16年度, ①第1次腋果房の花芽分化を促し(内葉数9~13枚を5枚程度へ), 果房を連続させる。

②厳寒期の草勢を維持し, 展葉速度を上げ果房を連続させる, ③収量向上を図る, の試験目標を設定し, 試作肥料2種をそれぞれ80袋作成し, 県下の全産地で施用試験を実施しました。

16年度は, 台風が相次ぎ襲来し, 土壌条件が整わないままでの定植や, 定植遅れでの試験となりましたが, 一定の傾向が得られました(アンケート結果参照)。

施肥試験アンケート調査結果

調査項目	調査結果（慣行肥料との比較）
肥料の形状 (粒径を揃えた配合肥料)	・「扱いやすい」「(慣行のペレットと)変わらない」で95%。
果房の連続性	・試作肥料1：2番果房が「連続する」が58%。 ・試作肥料2：2番果房が「連続する」が53%。
収量性	・試作肥料1：頂果房, 2番果房, 3番果房とも「変わらない」が最も多く, 50～61%。 ・試作肥料2：頂果房で「少ない」が72%。
製造販売の必要性	・試作肥料1：「商品化を望む」が70%。 ・試作肥料2：「商品化を望まない」が60%。

「あまおう専用肥料」の原料配合割合及び成分

原 料	使用割合	N	P	K	Mg	Mn	B
有機820	57.0	4.56	1.14			0.29	0.11
LPコートS120	11.0	4.40					
リンスター	19.5		5.85		1.56		
硫加(粒)	7.5			3.75			
硫マグ(粒)	5.0				1.25		
合 計	100	8.96	6.99	3.75	2.81	0.28	0.11
保証成分		8.0	6.0	3.0	2.0	0.15	0.05

- ・有機態窒素は約50%を確保し、残りは被覆尿素120（シグモイドタイプ）を使用し初期生育を抑え、2番花房の花芽分化を促す。
- ・有機質肥料は、植物質18%+動物質37%。
- ・リン酸はく溶性、水溶性を含むリンスターを使用。
- ・カリ過剰圃場を考慮しカリは3%に低減。
- ・苦土は水溶性を約半分含む。
- ・配合ムラの少ない粒径。

試作肥料1は、「2番果房が連続しやすく、収量は慣行肥料と変わらない」との結果から17年度産からは、試作肥料1を「あまおう専用肥料」として、「あまおう」の基準肥料に位置付け、製造販売することにしました。作製した「あまおう専用肥料」の最終的な内容は別表の通りです。

最後に

‘あまおう’は、知事のトップセールスやテレビCMの放映、新聞や雑誌での広告など積極的に取り組んだことと、大玉で味がよいことからマスコミに取り上げられる機会が多く、市場・販売店からもいち早く認知されることとなりました。また、価格も他の品種と比較して約10%以上高い価格で取引されています。15年度からは、県・農業団体で、アジア向け輸出を開始し、「守りの農業」から「攻めの農業」へ転換を図ろうとしています。

‘あまおう’は本格生産3年目で、まだまだ作りこなしている状態ではありません。今後も課題を克服し、‘あまおう’の秘めた力を最大限に発揮させていきたいと考えています。

—— チッソ旭の肥料で豊かな実り! ——

コーティング肥料

エコロング® ハイコントロール®
LPコート® マイスター®
ニュートリコート®
苗箱まかせ®

緩効性肥料

CDU®
ハイパーCDU

泡状肥料

あさひポーラス®
あさひブリケット®



硝酸系肥料のNo.1

燐硝安加哩®

打ち込み肥料

グリーンパール®
ロングパール®

培土

与作®
苗箱りん田®

 チッソ旭肥料株式会社